筑紫女学園大学リポジト

6. Ogai MORI and Mizuki TAKEYA

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武谷, 恵美子, TAKEYA, Emiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/682

7、長崎大学薬学部「長崎薬学史」www.ph.nagasaki-u.ac.jp/history
『新潮日本人名辞典』一九九一年三月新潮社
『朝日日本歴史人物事典』一九九四年十一月朝日新聞社編
などによる。
8、注3に同じ
9、「武谷家文書」
10、大熊浅治郎「史学會先覚武谷水城翁の遠逝を悼む」『筑紫史談』第七十五集（昭和十四年九月十日）
11、太宰府市史編さん室「武谷家文書概要調査目録」第一次（一九九九年三月）や未調査の「武谷家文書」などにみられる。

であるから、かなり差し引いてみるべきと思われるが、その大方は窺えるであろう。筑紫史談の執筆とともに種々の著述が残っているようである。[注11] 漢詩文や和歌をよくし歴史に興味を抱く陸軍軍医武谷水城に、森林太郎は相通じ響きあうものを感じ、なにがしか心を許していたのかもしれない。

武谷水城への森林太郎の二十二通に及ぶ書簡には、信頼関係のなかではじめて吐露されるような内容が見られる。そのようなことが可能であったのは、回覧書簡の明治二十四年以前から、長い期間にわたり人間的な関係があったからではないかと推察されるのである。

武谷水城の回覧書簡を解読するにあたって、大変お世話になった太宰府市史編さん室の日比野利信氏に深謝する。

注

1、『鷗外全集』第三十六巻（岩波書店昭和五十年三月）書簡番号九十一　一通
武谷恵美子「森鷗外の武谷水城宛書簡一通」『筑紫女学園短期大学紀要』第三十四号（平成十一年一月）所載　一通
『鷗外』六十六号（平成十二年一月）掲載予定　二十通

2、「官員録」
「職員録」
武谷水城の曾孫・武谷道彦氏が福岡県立図書館に寄託している「武谷家文書」の尾石豊・武谷豊・武谷水城の補任状
「武谷家系譜」（仮称）（墓誌など）
などによる。

3、武谷水城「旧陸軍軍医学校ノ回顧」『軍医團雑志』第二百二十号昭和六年十月発行

4、「官報」明治二十三年六月九日

5、「武谷家文書」の中

6、「官報」明治二十四年六月十七日

たのは、石黒の不在のため、その代わりを仰せつかったとも考えられなくはないが、それならば、それなりのことわりの文面があるはずであろうし、「操上ケ相催」とあるからにはそのメンバーではあったのであろう。なぜ、武谷水城がこの月例茶話会に加わっていたのか。それはともかく、五名のメンバーのそろう期間は明治二十三年末から二十五年三月上旬までの一年半で、この回覧書簡の回答では森は欠席であるが、月例の茶話会であれば、この一年半の間には概ね月一回の割合で武谷水城は森林太郎と顔を合わせていたであろう。

ところで、武谷水城は、明治二十三年一月五日発行『國光』第一巻六号[注9]に「恩賜盃記」の漢文を載せ、二十四年より二十五年に毎号「瓊の徳」欄に詠歌を続出し、「國の礎」欄には「慈善之事業」（萬國赤十字社の起源来歴事業を叙す）の長編を分載し、涙松記の漢文なども掲載したという。[注10] また前述したように「豊」と称していた名を、明治二十三年に出生の地名にちなむ「水城」と換えている。明治四十三年に福岡に帰郷してのち陸軍軍医時代などの自歴を語ることなく、[注10] 後半生は、専ら郷土史の研究に情熱を傾け、筑紫史談会を創設し、会誌「筑紫史談」をその死に至るまで二十六年の間に七十四集を刊行し、執筆を続けた。大熊浅治郎氏の言葉[注10]によると、武谷水城は「杏林を出で医者を超越し、博く典籍を渉猟し、歴史に精通し、博聞強記なり、詩界に馳駆し歌道に精進し文章自在を極む。亦行楽としては謡曲を嗜好し宝生流を学び一家を成し、屢々能楽堂の催能に列し地謡を聴かざるはなし。翁出でては諸会に講演し、推されては公会に挨拶を試む、言辞荘重明暢を極めたり。入りては書斎に蟠踞し、蔵書に塡まり詮索に努む、日課としては厳密なる日誌を裁す、其学究精力の致す所驚かざるを得ざるなり。（略）翁性行厳格、操守堅固、信念強固、毅然として動かすべからざるものあり、史界重要問題に逢着しては破邪顕正之れ努め、徹底せざれば已まざるの慨あり、筑紫史談を刊行し、筑前を中心として維新前後に於ける旧藩史実を始め、往古に渉り弘く史乗の調査研鑽に努め、正確なる史論を発表し、椽大なる筆力の迸る所」があったとのことである。弔辞

二十二年には「衛生会議議員」を兼ね、二十六年まで在官。明治三十一年（一八九八）五月十一日東京で没す。著書に『生理学』や『定性化学試験要領』、『バクテリア図鈔』の編訳などがある。

森は、明治七年一月第一大学区医学校（同年五月東京医学校と改称）に入学しているので、永松東海とは、八年五月から東京医学校での師弟の関係である。森の帰朝後の明治二十一年からはともに、軍医学舎のち軍医学校の教官で、また衛生会議議員としても席を並べた。おそらく最年長者と最年少者であったであろう。森が軍医学校長となった年には永松東海はすでに退官している。

以上四名は軍医学校の校長又は教官と言う共通点をもつ。しかし、この時点の校長が加わっているわけではない。また、二十二年に石黒は衛生会議議長で、永松は衛生会議議員である。石黒が軍医総監・医務局長になった二十三年からは永松、小池、森は衛生会議議員になっている。茶話会のメンバーの中で、ただ一人武谷は軍医学校教官でも衛生会議議員でもない。

後年八十才の武谷水城が『軍医團雑志』に「旧陸軍軍医学校ノ回顧」[注8]という小文を載せている。旧陸軍軍医学校の創立からの推移、その建物のこと、費用や軍医生徒のこと、学科の内容などのべられているなかに、学校職員がなにを教えたかを逐一書いているところがある。「一等軍医正（今ノ二等軍医正、当時奏任官ニテ中佐相当）緒方惟準氏ガ校長ノ資格デ、病理学ノ講義ヲ担当シ、兼ネテ雇教師ノ通弁（内科学）ニ任ジ、外科ガ二等軍医正（今ノ三等軍医正、薬剤正亦同ジ）足立寛」という具合で、「薬物ガ二等薬剤正永松東海」とある。武谷水城もまた永松東海に教えられている。

このような師弟関係に加えて陸軍省内でなんらかの交渉がありえたではあろう。陸軍省の軍医総監で医務局長の石黒が加わっての茶話会は、私的な会合ではあるものの、どのような性格のものであったのであろうか。この月例茶話会のメンバーからすると、武谷水城が加わっていることには、やはり不思議な感を持つ。武谷がこれに加わっ

の留守はありえたことであろう。この大阪第四師団への差遣の期間が石黒閣下の「派出中」にあたり、この回覧書簡は明治二十四年六月二十五日付のものとすることができる。

ところで、この書簡に見える月例の茶話会の五名のメンバーはどのような関係なのであろうか。五名を年令順にその生没年を挙げ、回覧書簡の時点での職務をその下に記すと次の通りである。

永松東海　天保十一年（一八四〇）～明治三十一年（一八九〇）軍医学校教官兼衛生会議議員

石黒忠悳　弘化二年（一八四五）～昭和十六年（一九四一）軍医総監・医務局長

武谷水城　嘉永六年（一八五二）～昭和十四年（一九三九）近衛師団第一連隊附

小池正直　安政一年（一八五四）～大正二年（一九一三）軍医学校教官兼衛生会議議員

森林太郎　文久二年（一八六二）～大正十一年（一九二二）軍医学校教官兼衛生会議議員

二十四年に軍医総監で医務局長の石黒は、軍医学校創設の二十一年、二十二年はその校長であった。小池は明治二十一年三月から二十三年十二月の間、ドイツに留学していたが、その前後には軍医学舎（軍医学舎は二十一年十二月から軍医学校となる）および軍医学校の教官をしている。森も帰国の二十一年十二月には軍医学舎教官、そして軍医学校教官となっている。この三名の関係はよく知られているところであるが、永松東海については森との関わりではあまり知られていないかと思われるのでその略歴[注7]を次に記す。

天保十一年（一八四〇）九月二十九日肥前国佐賀に生まれた蘭方医、化学者である。本姓は原。長崎の蘭医ボードウィンに医学、化学を学び、佐賀の医家永松玄洋の継養子となる。明治三年大阪府立医学校講師、七年三月初代東京司薬場長となり、薬品試験業務を開始し、その創設期の整備に尽力したが、病気のため一年足らずで退任、八年五月から東京医学校で生理学を講義、十三年日本薬局方編集委員（陸軍二等薬剤正兼二等軍医正）として薬局方制定につくす。十九年には陸軍一等軍医正で陸軍省の軍医学舎教官、二十一年陸軍軍医学校設立とともにその教官。

六月廿五日　　武谷水城

永松東海様　出席

小池正直様　出席可仕候

森林太郎様　乍遺憾差支有之欠席可仕候

御廻達奉願候也

出席・欠席などの返事の文字は別筆である。永松と小池とは一筆であるように見えるが、森の返事は二人の筆とは別で森自身の筆のようである。二十五日発信で二十九日には回覧は回収されている筈である。封筒、書簡に年記はなく、回覧であるので郵便消印はなく、何年のものであるかはわからない。

この文面によると、石黒忠悳、永松東海、小池正直、森林太郎に武谷水城の五名で毎月茶話会をもっていたことになる。いつからいつまで開かれたものか、また五名の入れ替わりがあったものか、どういう目的であったかなどわからないが、各自宅を当番制で巡回して開かれたらしい。連名での回覧であるから、石黒派出中でかつ四名の人物が、陸軍省内に勤務した時期のことである。また武谷水城は明治二十二年までは武谷豊を名乗っていたので、「武谷水城」の著名は二十二年以降であることを表している。

書簡の日付は六月二十五日である。永松東海、小池正直、森林太郎と武谷水城の四名がともに東京で勤務していた六月二十五日は、明治二十四年だけである。永松、小池、森の三名とも陸軍軍医学校教官で衛生会議議員を兼ね、永松は一等軍医正、小池と森は二等軍医正であり、武谷水城は近衛歩兵第一師団歩兵第一連隊附の二等軍医正である。またこの年、軍医総監で医務局長の石黒は六月十五日付で「御用有之第四師団」[注6]へ差遣されている。なにのための差遣かはわからないので、半月間は長すぎるようにも思われるが、何事も時間のかかる当時としては六月末迄

三十七年三月六日第一師団軍医部長（日露開戦で復職）
三十九年三月二十二日陸軍軍医監、予備役編入
四十二年福岡市へ帰郷
大正二年三月筑紫史談會創設
三年四月会誌筑紫史談第一集を刊行
昭和十四年（一九三九）八月十五日没。八十八才。

右の武谷の経歴からわかる任地と森の経歴とつき合わせてみると、明治三十三年以前では、森が二十一年に帰国し陸軍軍医学校の教官をしていた時期で、武谷が在京していた二十一年から二十四年の間が、接触の可能性のある時期と考えられる。この間、二十三年六月六日には森など六名とともに、武谷は二等軍医正に任じられている。[注4] 軍医学校教官の森が、第一師団軍医部医員、近衛連隊附の武谷とどのような関わりがありうるのであろうか。二人の関係の一端を窺うことのできる武谷水城発の回覧書簡[注5]があるので、それをここに紹介する。

その封筒の表書きは、「武谷水城殿　侍史」となっており、封筒の裏書きは「永松　小池　森　拝復」で、表書きの文字と同筆と思われるが、誰の筆であるかは今のところわからない。封筒の中の書簡は、宛名が三名連記の回覧形式の、武谷水城差し出しのものである。その文面は次の通りである。

拝呈益御清適奉賀候然ハ本月茶話会石黒閣下ニ於テ催可相成筈之処派出中ニ付小生ニ於テ操上ケ相催候間来ル三十日午後第三時半神田区猿楽十三番地自宅へ御来会被成下度此段御案内申上候也追テ御差支有之候節ハ乍御手数廿九日迄ニ御一報被成下度此段申添候也

嘉永五年（一八五二）十二月十六日（嘉永六年一月十六日）福岡藩士尾石信一（惣平）の男・尾石豊として筑前国御笠郡国分村水城に生まれ、福岡の藩学修猷館及び文武館に学び、明治五年金沢医学校で和蘭教師スロイスについて基礎医学を学ぶ。明治七年福岡藩医武谷祐之の養嗣子となる。九年祐之の三女仲と結婚。

明治七年九月旧陸軍軍医学校（明治五年三月軍医学寮の名で創設され、翌六年に軍医学校と改称されたらしい。明治二十一年に創設された陸軍軍医学校と区別して旧陸軍軍医学校と称す[注3]）に入学

十年二月二十日卒業、二十一日付で陸軍軍医試補となり陸軍本病院第一課、三月西南役に従う。

ここまで尾石豊、四月一日より武谷豊

十二年一月二十日近衛歩兵第一連隊副医官兼本病院第二課、五月十日東京鎮台歩兵第二連隊第三大隊副医官

十三年九月七日大坂鎮台病院課僚

十七年六月二日廣島陸軍病院課僚

二十一年十一月三十日第一師団軍医部部員、二十二年十月二十四日近衛歩兵第一連隊附

ここまで武谷豊、この後、武谷水城

二十五年三月十四日第三師団（名古屋）歩兵第十九連隊附

二十七年七月二十三日第五師団（広島）野戦病院長（日清戦役）、二十九年三月十一日広島衛戍病院長

二十九年十二月二十二日台湾守備混成第二旅団軍医部長

三十一年十月一日第二師団（仙台）軍医部長

三十三年七月十三日医務局衛生課長兼陸軍衛生会議議員

三十五年三月十五日第十二師団（小倉）軍医部長

三十六年十二月二十四日病のため一時休職

森鷗外と武谷水城

武谷恵美子

Ogai MORI and Mizuki TAKEYA

Emiko TAKEYA

森林太郎は、明治三十三年から三十七年の間に、陸軍軍医武谷水城に宛て二十二通の書簡[注1]を送っている。三十三年に七通、三十四年に十一通、三十五年に二通、三十六年一通、三十七年一通である。三十七年の一通以外は、森が小倉第十二師団軍医部長で武谷が衛生課長であった時（十八通）と、森が第一師団軍医部長で武谷が小倉第十二師団軍医部長であった時（三通）で、東京と小倉との間で書簡が往還している。三十七年の一通は、日露開戦で出動する第二軍軍医部長になった森が、森の後任の第一師団軍医部長武谷に、出発前に送ったものらしい。多数をしめる小倉の森からの書簡は、多く人事に関する依頼や情報提供である。このような人事に関する情報交換が通常行われていたものかどうかは知らない。あるいは、軍医部長がその管轄下の人事について、医務局の衛生課長に意見を陳べたりするのは当たり前のことなのかもしれない。が、武谷水城宛の書簡において、きっぱりとした判断や無理な申し入れ、さらには処世法などまでが書かれているのは、その意を隔意なく受け入れてくれる相手として武谷水城を信頼してはじめて可能になるものではないだろうか。それでは、そのような書簡を送られた武谷水城は、森第十二師団軍医部長・武谷医務局衛生課長の時期以前に、森林太郎とどのような接点があったのであろうか。

まず、武谷水城の略歴[注2]をたどってみる。